

2021年「3・11」を考える

花田恵子

2月13日の午後11時08分頃に東北沖を震源とする震度6強の地震が発生したというツイッターの投稿を見て、ちょうどその時、依頼されていたこの拙文を書くためにパソコンの前に座っていた私は、余りのタイミングに思わず声をあげた。テレビの画面で、長く大きく揺れている光景を見てみると、10年前の余りにも無残なシーンがフラッシュバックしてくる。あの何もかも押し流し飲み込む濁流により、損なわれ失われた人々の命や生きる場。何よりも気がかりなのは海沿いに立つ原発の建屋だ。

今回はすぐさま福島第一原発に異常は認められませんかコメントされていたが、10年前の「ただちに影響はありません」というまやかしの言葉を思い出すと、本当かなという疑問が湧いてくる。

2011年の3月。私はそれまで17年間経営していたカフェを15日に閉じて、私の誕生日の21日には憧れの東北への旅に出ようとウキウキしていたのだった。以前から関心があった東北地方の有機農業や自然農を営む農家さんを訪ねつつ、好きな山に登ったり、スケッチをしながらの自由気ままな車での旅。

それが突然の大災害に見舞われた地として、心の底にずっと沈み込んだまま10年近く経つというのに、まだ軽やかな旅への一歩が踏み出せずにいる。もちろん、これまでに、友を訪ね、イベントに参加し、岩手や宮城、福島などを巡ったが、ぽっかりと心に空いた穴を埋めきれずにいる。確かに、世界最悪レベルといわれた原発事故により、あの美しかった福島の地は汚染され、大量の廃棄物や汚染処理水に溢れ、見渡す先には黒いフレコンバッグの山が重なり、福島県では今でも数万人が県外に避難中という。

2011年3月15日には、放射能を恐れて関西へ避難してくる人たちを何とか手助けしたいと、周りの若者たちと動き始め、未知の原子力発電や放射能による被害についての学習会が始まり、「にんにこ被災者支援ネットワーク・和歌山」を立ち上げ支援活動を始めた。その時になって、あらためて深く感謝したのが、それ以前にさかのぼること20年以上も前に、この私たちが住む和歌山で原発建設の動きが何度かあり、それを阻止するために数多くの方々が闘ってくれた歴史があるということ。これこそが、今、私たちが誇りを持って環境のことや農業・食糧のことについて活動できる原動力となっていると思えたのでした。そして、この10年の間に原発のことだけではなく、憲法と平和についてや、農業・食糧など持続可能な社会の実現へ向けての様々な行動の中で出会った人々と、つながり行動すること、そして声を上げるという大切なことを学べたのではないのでしょうか。

